

二〇二五年度

神奈川学園中学校入学考查問題

国語

(A日程午後)

時間 五十分

- 問題は、一ページから十七ページまであります。
- テスト開始前に、問題用紙のページに脱落だつがないかどうか確認しなさい。
- 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 文中からのぬき出しや答えに求められている字数は、各問いの指示に従いなさい。
特に指定がない場合は、句読点などの符号ふしうを入れても入れなくてもよい。

問題一

次の(1)～(10)の——線部の漢字にはその読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- (1) 自分のケイソツな行動を反省する。
- (2) 有名画家のフクセイ品を入手する。
- (3) 出された意見にイギをとなえる。
- (4) 文学作品のロウドク会に参加する。
- (5) 国に税金をオサめる。
- (6) 図書館の蔵書を点検する。
- (7) 人の指図は受けない。
- (8) 人目を気にして体裁だけ整える。
- (9) 史実に基づいて書かれた作品。
- (10) ご予約を承りました。

問題二

次の(1)～(5)は四字熟語です。□に入る漢字一字をそれぞれ答えなさい。また、完成した四字熟語の意味を後のア～オからそれぞれ選び、その記号で答えなさい。

- | | | |
|----------|----------|----------|
| (1) □石混交 | (2) 新□気鋭 | (3) 千差□別 |
| (4) 大胆不□ | (5) □刀直入 | |

- ア ある分野にあらたに登場したばかりで勢いが盛んなこと。
 イ 非常に度胸があつて、何もおそれないこと。
 ウ すぐれたものとおつまらないものが入りまじっていること。
 エ たくさんあるものが、それぞれちがっていること。
 オ 遠回しな表現をしないで、いきなり本題にふれること。

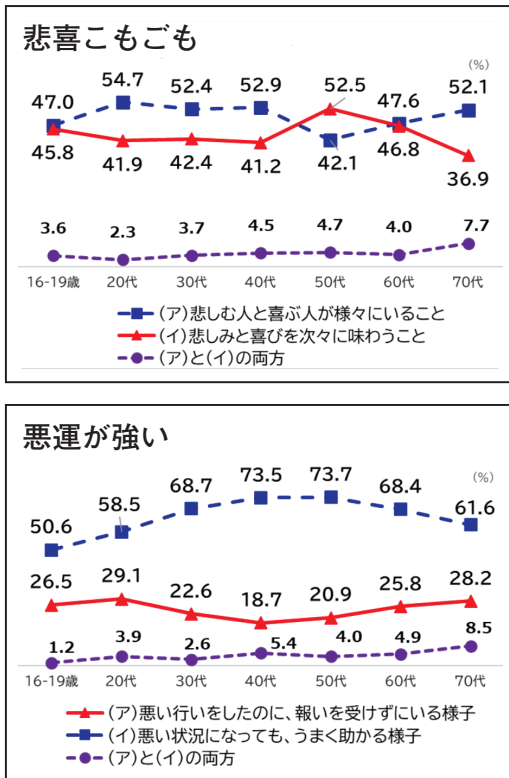
問題三

次の資料は、言葉の理解に関して、全国の十六歳以上を対象にした調査の結果です。辞書等で本来の意味とされてきたものとは異なる意味として理解されていることが多い言葉に関して、(ア)と(イ)どちらの意味だと思うかを調査しました。次の資料を読み、後の問いに答えなさい。

〈全体の回答〉

悲喜こもごも		%
(ア) 悲しむ人と喜ぶ人が様々にいること		49.7
(イ) 悲しみと喜びを次々に味わうこと	※本来の意味	43.4
(ア)、(イ) の両方		5.1
(ア)、(イ) とは全く別の意味		1.3
無回答		0.6
悪運が強い		%
(ア) 悪い行いをしたのに、報いを受けずにいる様子	※本来の意味	24.3
(イ) 悪い状況になってもうまく助かる様子		67.2
(ア)、(イ) の両方		5.4
(ア)、(イ) とは全く別の意味		2.7
無回答		0.4

〈年代別の回答〉



(文化庁「令和五年度国語に関する世論調査」より作成)

問

次のA～Eについて、上の資料から読み取れることとして正しいものは○、間違っているものは×の記号でそれぞれ答えなさい。

A 「悲喜こもごも」という言葉を辞書で調べると、「悲しむ人と喜ぶ人が様々にいること」という意味が本来の使い方として載っている。

B 「悲喜こもごも」の五〇代の回答を見ると、本来の意味とは異なる意味を選択した人の割合が、本来の意味を選んだ人の割合を上回っている。

C 「悪運が強い」は、どの年代においても、本来の意味で使っている人の割合が低いため、本来の意味で使っても、相手に正確に伝わらない可能性がある。

D 「悪運が強い」についての〈年代別の回答〉を見ると、正しく使っている人と誤って使っている人の割合の差が五〇%以上も開いている年代がある。

E 〈全体の回答〉を見ると、「悲喜こもごも」と「悪運が強い」のどちらにおいても、辞書で本来の意味とされているものとは異なる方の意味を選択した人の割合が一番高くなっている。

問題四

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(問題の都合で本文の一部を変えています。)

これからは、ママが言うように「楽になれる」と思うと、愛は入学式で涙ぐみそうになったほどだ。

今まで我慢^{がまん}していた先生への質問も、これからは出来るようになるかも知れない。

入学式から一週間ほどが経^たち、ようやく本格的な授業が始まろうとしているところだった。今日からお弁当も始まる。

昼休みのチャイムが鳴ると、出席番号が前後の女子たちが、愛の脇^{わき}にすり寄ってきた。体があ^Aしたが、悟^{さと}られないように抑^{おさ}えた。何度か会話をかわしたことがある、席の近い生徒たちだ。

「米倉さん、いっしょにお弁当、食べよ」

「あ、うん。いいよ」

愛は、しどろもどろに答えた。

「米倉さんのこと、愛って呼んでもいい？ わたしのことは、マーヤでいいよ。名前は麻耶^{まや}だけど、小学校のときからマーヤってあだ名だったから」

^B 知らないうちに、ブレザーの裾^{すそ}の端をつかまれている。

「分かった」

愛のぶつきらばうな返事に、ふたりは一瞬^{いつしゆん}目を合わせたが、もうひとりの子が、

「この机くつつけよっか」

と、手際よく、机を動かした始めた。音が耳に刺^ささるようだったが、平気な顔を装^{まも}ってこらえた。

明星女学院はミッションスクールで、屋外にはチャペルの前に広々とした芝生^{しばふ}のスペースがある。今日は天気も良く、開放感があって、とても気持ちよさそうだった。

愛は、そこでお弁当を食べたいと思っていた。

「ね、せっかくだから、芝生のところで食べない？」

愛は思い切って提案してみた。

机を動かしていた子が手を止めて、戸惑^{とまど}いを見せた。

「最初から外つていうのもね。休み時間、意外と短いし。それに、一年生がいきなりつていうのも、どうかな」

「だよね。ひよっとしたら高校生たち？ 先輩^{せんぱい}たちが芝生は占領^{せんりやう}するつていうルールがあるかも知れないし」

そんなルールあるのだろうか、と愛は疑問に思った。そのとき、

① 協調性がない

小学校のS先生の言葉が、S先生の声音^{こゑ}のままで、よみがえってきた。

「そうだね」

気付けば、合わせていた。

^C 「もうひとり、ほしいよね」

マーヤがつぶやくと、

「あ、わたし、あの子誘^{さそ}ってくる」

^D 机を動かしていた子が、教室の入り口^(注1)の方に向かって、ダッシュしていった。そこには、どうしたものかと所在^{しよざい}なげに、目をい^い動かしている生徒がいた。

愛は教室をあらためて見わたして、やつと気付いた。

(注1) 所在ない：何もすることがなく退屈なさま。

今、まさに、クラスのグループ分けが、確立されようとしているのだ。ここで机を合わせてお弁当を食べるのが、その第一歩なのだろう。

そんな大事なときに、うっかり外なんかに出かけてしまったら、これまた大事な、他のグループの観察ができなくなってしまうのだ。

愛は、^②このことに違和感を覚えたが、それよりも、自分もグループに入ることが出来たという、とてつもない安堵感^(注2)の方が勝っていた。

^③小学校のときみたいに「協調性のない」自分になってはいけない。あの孤独^{こどく}を二度と味わいたくはない。

今度こそ、失敗したくない。

唐突^{とうとつ}に、そんな思いがこみ上げた瞬間^{しゅんかん}だった。

^④「楽になれる」はずの、中学生生活はちつとも楽ではなかった。小学校のときはまた別の苦しみがあった。

自分を出せば、きつと浮いてしまう。マーヤたちのグループにいるためには、みんなに合わせなくてはいけない。

そのことは予想以上に、神経を消耗^{しょうしょう}させた。

夏休みが目前のある日、数学の授業で、D先生が応用問題を出した。

「これは、はつきりいつて高校数学。でも君たちの優れた頭脳なら、出来るかも知れないな。さあ、分かる人」

D先生は、数学を愛してはいても、子どもに教えることへの情熱に関しては、少しピントがずれていた。難しい問題を出しては生徒を試して、喜んでいるように見えた。

(注2) 安堵：気がかりがなくなって安心すること。

愛には答えが分かった。解けたことで、^⑤が勝手に騒ぎ出した。胸が高鳴る。

手を挙げたい衝動^{しゅどう}にかられたが、こぶしを握^{にぎ}ってグツとこらえた。目立ってはいけないのだ。

すると先生が、

「米倉、どうだ？」

目が合ったわけでもないのに、いきなり振^ふってきた。首を横に振れば良かったのに、答えをつぶやいていた。

「ビンゴ」

D先生は嬉し^{うれ}そうに、上体を左右に揺^ゆらした。

「さすがは、米倉だなー。米倉は入試の算数、満点だったもんなー。まさに、逸材^{いつざい}」

クラスでどよめきが起こった。

明星女学院の入試問題の算数は、かなりの難問が出ることが定評で、半得分点できればいいという噂^{うわさ}もある。

だからこそ、愛にとっては国語の記述の点数が取れなくても、断然有利に働いたのだ。

D先生の言葉に、愛は絶句した。

どうして、そんなことを、みんなの前で喋^{しゃべ}るのだろう。

I I。それを、はにかみや謙遜^{けんそん}とでも捉^{とら}えたのか、D先生はますます調子にのった。

「うちの入試問題で、満点をとる生徒は、減多^{めった}に出ないんだよ。女子は数学が苦手だっていうからね。失礼、これはセクハラでした」

D先生は自分の後頭部を、う手のひらでたたいた。教室はしらくけきり、ウケをねらったらしいD先生は、^⑥バツが悪くなったのか、話を

戻した。

「米倉、おいおい話そうと思っていたんだが、是非、日本ジュニア数学オリンピックに挑戦してみないか。先生は全面的にサポートするよ」

II。

日本ジュニア数学オリンピック？ 数学で闘うってこと？ すごく面白そう！

一気に血流が上がった。でもすぐに、自分で自分に冷水を浴びせた。そんな目立つことをしたら、マーヤたちとの関係が、おかしくなったりはしないだろうか。そう考えることすら、不遜なのだろうか。

III。

自分の才能を恨んだ。

普通でいいのに。普通がいいのに。

マーヤたちからは羨望の目で見られるようになった。対等に見えた関係が、グループの中でなんとなく、ちやほやされるような立ち位置に変わった。

嫉妬心も隠されていたかも知れない。明星女学院の生徒ならば、小学校のときには勉強で、断トツでトップクラスにいただろう。でも、トップばかりが集まってくる学校に入ると、やはりそのなかでのヒエラルキーが生まれてしまう。

プライドの高さが足かせになることで、トップではなくなることは、

(注3) 不遜…思いあがっていること。

(注4) 羨望…うらやむこと。

(注5) ヒエラルキー…上下関係。

余計に酷だ。もし一ランク落とした学校に行っていれば、今でもトップでいられただろうに。愛がそんな彼女たちから妬まれたとしても、不思議ではない。

出過ぎないようにという注意が、いつそう必要になった。

D先生は、さすがに教室で言うことはなくても、廊下などで会うと、しつこく「日本ジュニア数学オリンピック」のことを勧めてきた。

隣にマーヤたちがいても、お構いなくだ。

「興味ありません」

愛がそっけなく目をそらせると、

「もったいない。実にもったいない。その才能、先生がほしいくらいだ」

D先生は悔しそうに、下唇を突き出した。

目立つことをしてはいけないのだ。それは「協調性」を乱すことなのだ。

⑦ 神経にかけるやすりが、ピッチをあげた。

あるときから、数学の授業の前になるとお腹が痛くなり、保健室に行くようになった。

しばらくすると、数学の授業のある日には、朝お腹が痛くなり、学校を休むようになった。

そしてとうとう、冬休みを待たずして、愛は不登校になった。

(注6)

優希は愛の話を聞いているあいだ、ときおり涙が出そうになった。で

(注6) 優希…愛が転校した先の中学校のクラスメイト。

も、愛の話を邪魔したくないし、自分が泣くのは違う。

ただまっすぐ川の流れを見つめ、心をなだめ落ち着かせ、じっと聞き入った。

自らの探究心や意欲を、根こそぎ折られた小学生のころ――。

周りに迎合しなければと必死になり、神経をすり減らした明星女学院のころ――。

際だった才能を持ったギフテッドだったがゆえに、愛が余計に背負ってきた孤独感を思うと、胸が締めつけられる。

愛は一度深呼吸をすると、続けた。

「さっきも言ったけど、みんな違ってみんないい、はずなのにね。学校って校則みたいに目に見えるルールよりも、同調圧力みたいに目に見えないルールの方が、意外とやっかいだったりするかも」

「同、調、圧、力」

誠が区切りながら復唱した。優希が大きくうなづく。

「それぞれ違うことを考えていたり、思っていたりするはずなのに、みんな意見を言わないよね」

愛は背中をベンチの背もたれにあずけ、続けた。

「こう言ったら、あの人になんて思われるかとか、嫌われないかと心配ばかり。ま、自分がそうだったから分かるんだけど。本当は、三十五通りの心があるはずなのに」

愛の言葉は、優希の痛いところを え 突いた。

(注7) 迎合：相手の気持ちに合わせること。

(注8) ギフテッド：特定の分野で生まれつき高い能力をもった人のこと。

(注9) 誠：愛が転校した先の中学校のクラスメイト。

人にどう思われるか、いつも先回りして考えてしまう自分の心を見透かされているみたいだった。

「同調圧力があつたとしても、思ったことを、感じたことを、ちゃんと言うことが大切なんだね」

優希は胸に両手を重ねて、自分自身に言い含めた。

「⑧ 透明なルールつてさ」

「透明な、ルール？」

愛の言葉をなぞった。新たなワードが、心の中を お 切り開いた。何かをつかめそうな予感がする。

「ああ、同調圧力とかの、目に見えないルール。同調圧力は確かにあるんだけど……」

愛はそこで切って、考えるように首を傾けた。

あるんだけど……？

優希はじつと、その続きを待った。

「透明なルールって、同調圧力だけじゃない、って今になって思うんだ」
「どういうこと？」

思わず前のめりになってしまい、あわてて愛から体を離す。

「明星女学院のときに、日本ジュニア数学オリンピックを勧められたとき、目立ちたくないから、わたしは頑なに断ったでしょ」

「うん」

「でもあれって、みんなの反応を勝手に決めつけていたのかも知れない。透明なルールで、自分で自分を縛っていたんじゃないかって」

「ごめん、よく分からない」

「あのとき、もし、ジュニア数学オリンピックに出ようとしたら、マリーヤたちはひよつとして、いっしょに喜んでくれたり、応援してくれたり

したんじゃないかなって」

「それはありだよ」

誠が相づちを打った。

「だからね、あのとき、同調圧力なんて本当はなかったかも知れない。自分が自分に作ってしまう、透明なルールに、縛られていただけかも」

——自分が自分に作ってしまう、透明なルール

気付いたら、優希は少しの間、息を止めていた。

愛が帰ったあとも、優希と誠はしばらくベンチに座っていた。

「この風景、なんか新鮮しんせんだなあ」

誠が声をもらした。見慣れているはずの風景の、何が新鮮なんだか不思議だ。

「え、なんで？」

優希は誠の顔をのぞいた。

「僕ぼくの家はこっち側だけど、橋をわたるとたいていは、そのまままっすぐ家に帰っちゃうんだよね。だから川を眺ながめるときって、いつもなぜかあっち側からなんだよね」

「うんうん、萩野くんのお気に入りスポット、あっちだもんね」

優希が向こう岸に視線を向けた。

「だから、川は左から右に流れていたんだ。こっちから見ると、右から左に流れてる。あ、そんなのあたりまえか。自分で言ってる馬鹿みた
い」

誠が自分の頭をわしづかみにすると、優希は首を横に振った。

「違うよ。あたりまえすぎて、誰も気にも留めないことを新鮮だと感じる、萩野くんの感性が素敵すてきなんだよ」

「いや、そんな………」

誠はもじもじしている。

⑨ 優希は川の流れを眺めた。

川は右から左に流れている。同じ川でも向こう側から見れば、左から右に流れている。

もし川の中に立っていたとしたら、左右なんか関係なくて、川上を向けば川の流れに逆らうし、川下を向けば流れに押おされる。

川は変わらず静かに流れているだけなのに。

太陽が下流の方の住宅街の中に姿を落とした。住宅のでこぼことした影かげが、シルエットのように浮かびあがった。ひんやりとした風が、ふたりのうなじをなでていく。

「さ、そろそろ帰ろっか」

誠がベンチからおもむろに腰こしを上げた。

「そうだね」

優希も立ち上がった。

—— 佐藤いつ子『透明なルール』

問一

――線部A「出席番号が前後の〳〵寄り寄ってきた」・B「知らないうちに、ブレザーの裾の端をつかまれていた」・C「もうひとり、ほしいよね」・D「机を動かしていた子が〳ダッシュしていった」とありますが、ここから読み取れることは何ですか。その説明としてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、その記号で答えなさい。

ア Aでは趣味などの共通点ではなく、座席が近いだけで友達になろうと「すり寄って」きており、愛がそんな友達の作り方にしっくりきていないことが分かる。

イ Bではクラス内のグループ化が進む中、とにかく友人を作り自分の居場所を確保するために、愛をなんとしてもグループに入れようとする様子が読み取れる。

ウ Cでマーマたちは偶数のグループにするため、「所在なげ」な生徒に声をかけている。ここから彼女たちの友人づくりは頭数合わせのような印象を与えていると言える。

エ Dの「ダッシュ」は強い表現である。この表現からクラスのグループ分けが確立しようとする今、他のグループに勝ちたいという確固たる意志が読み取れる。

問二

あ 〳 お に入るもつともふさわしい語を次のア～カから選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

- | | | |
|--------|---------|---------|
| ア すつと | イ ばつこんと | ウ おどおどと |
| エ ぷすりと | オ びくりと | カ ぱたりと |

問三

――線部①「――協調性がない〳〵みえってきた」・③「小学校のときみたいに『協調性のない』自分になってはいけない」とありますが、ここから愛の、どのような気持ちが読み取れますか。その説明としてもつともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア 小学校での孤独な日々は、目立ちたがり屋な自分を抑えきれず集団生活に適応できなかったからであり、中学校では自分をねじまげてでも集団に合わせようと焦っている。

イ S先生が愛を「協調性がない」と決めつけたから小学校生活にゆきづまったのは事実だが、自分がクラスの和を乱したのも事実なので、先生への罪の意識をぬぐえずにいる。

ウ S先生の言葉が今もなお鮮明に思い出せるのは、愛が深く傷ついているからであるが、その一方で自分の何が悪かったかについての根本的な理解はできていない。

エ 小学校の時に「協調性がない」とS先生に言われて以降、先生の言葉が妨げとなり、愛が自分らしくふるまうことを難しくしている。

問四

——線部②「このことに違和感を覚えた」とありますが、これはどういう意味ですか。その説明としてもっともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア 自分がやりたいことよりも、周りに合わせることを優先している自分に疑問を持ったということ。

イ 教室以外で昼食を食べることなど考えもしないクラスメイト達の視野の狭さに疑問を持ったということ。

ウ 新入生だから先輩に目をつけられないよう自制するべきだという暗黙のルールに疑問を持ったということ。

エ グループ分けを密かに観察し、クラスの交友関係を把握しようとする自分のずるさに疑問を持ったということ。

問五

——線部④「『楽になれる』はずの～また別の苦しみがあった」とありますが、「小学生のとき」の「苦しみ」とはどんなことですか。その「苦しみ」を具体的に説明している部分を「～こと。」に続く形で6ページ以降の本文中から二十字以内でぬき出して答えなさい。

問六

⑤に入るもつともふさわしい語を次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア 血 イ 胸 ウ 心 エ 虫

問七

I IIIに入るもつともふさわしいものを、次のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア 愛は顔を上げた

イ 愛は机の角をじつとにらんだ

ウ 愛は視線を泳がせた

エ 愛は目を伏せた

問八

——線部⑥「バツが悪くなった」とありますが、これと同じ意味を持つ言葉を、次のア～エから一つ選び、その記号で答えなさい。

ア 分が悪い イ 人が悪い

ウ きまりが悪い エ たちが悪い

問九

——線部⑦「神経にかけるやすりが、ピッチをあげた」とありますが、この表現からどのようなことがわかりますか。その説明としてもつともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア「やすり」をかけた神経は一層敏感になる。ここから愛が、目立つことを極度に恐れ、自分の個性を出さないようにしているとわかる。

イ「やすり」をかけた神経は一層敏感になる。ここから、グループ内で意識して互いの価値観をそろえることで、友人関係を保とうとしているとわかる。

ウ「ピッチをあげる」には物事の進行を速めるという意味がある。ここから、数学オリンピックピックの話をされないよう、より一層D先生を避けようとしているとわかる。

エ「ピッチをあげる」には物事の進行を速めるという意味がある。ここから、数学に興味がないふりをするので、マーマヤたちともっと親しくなろうとしているとわかる。

問十

——線部⑧「透明なルール」とありますが、これはどのようなものですか。その説明としてふさわしくないものを、次のア～エから一つ選び、その記号で答えなさい。

ア 校則のように目に見える形で存在してはいないが、自分たちのふるまいを確実に抑制する周囲からのプレッシャー。

イ 周囲から浮くことを恐れるあまり、誰も求めていないのに自分で自分の自由を狭めようとする意識。

ウ 一般的に「みんな違ってみんないい」とされるが、実際は他と異なる存在を認めず、はじこうとする集団の空気。

エ「みんな同じ」から外れると相手を傷つけてしまうため、常に先回りして周囲に合わせようとする態度。

問十一

——線部⑨「優希は川の流れを眺めた」とありますが、ここで優希はどのようなことに気づいたのですか。その説明としてもつともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア 立つ岸を変えると流れが逆に見えるが、川自体は何も変わっていないように、真実は一つしかないということ。

イ 立つ位置を変えれば川の流れも反対になるように、視点が変わるとものの見方も変わること。

ウ 川での立ち方次第で逆らったり流されたりするように、集団に流されるか立ち向かうかは自分次第だということ。

エ 川は常と同じだがその事実気づけていないのと同様、大切なことは当たり前に見えるものの中にあるということ。

問題五

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(問題の都合で本文の一部を変えています。)

〈男らしさ〉とは競争を優位に進めていくために求められる特性でした。たくましさや勇ましさを発揮できる男性ほど、社会的に価値を認められた「達成」に近づけるはずです。逆に言えば、簡単にあきらめる、

Ⅰ、へこたれるのは、〈男らしくない〉ということになります。

そうした「弱さ」の象徴として男子に禁じられているのが涙です。例えば、予防接種で注射を打つ際に、親や周囲から「男の子だから泣かないの」と言われた経験はないでしょうか。そこまでⅡではなくても、転んで泣かなかったことを「偉いね」と褒められたりしたかもしれません。泣くことは〈男らしくない〉行為であると学んだ男子たちは、簡単に涙を見せないようになっていきます。

痛みや苦しみを涙で表現できなくなるだけではありません。男子のみなさんは映画を鑑賞かんしょうしていて思わずウルとするような場面があっても、涙をぐっとこらえることがあるはずです。感動して涙を流すようなやさしさや繊細せんさいさは、〈男らしさ〉と相反あいはんするとされているからです。

はじめは褒められたいから頑張がんばって涙を見せないようにしていた男の子は、やがて、何も言われなくても人前で泣くのは「恥ずかしい」と感じるようになります。^①自分の外側にある社会的なルールを内面化していくのです。

男性は感情をコントロールできているとⅢに評価できるようにも思えます。Ⅱ、自分も周りも、男の子の心と体に対して鈍感どんかんになっているのかもしれませんが、体については、小さな男の子でも、高いところに登ったり、そこから飛び降りたりして遊びます。女の子であれば、

ケガの恐れから、そうした遊び自体が禁じられることもあるはずですが。

先日、大学生の男子と話していたら、中学校の頃ころに、じゃんけんで負けた方が肩かたにパンチをされるという遊びをしていたと教えてくれました。これは僕が中学生だった一九八〇年代後半にもあった遊びです。男子の思い出話に対して、その場にいた女子たちはそのあまりに幼稚なエピソードに呆あきれかえていました。

心の問題は外からは見えないだけに、その深刻さが表面化しにくいと言えます。臨床心理士のテレンス・リアルさんは、「^②教室の隅でひっそりふさぎ込んでいる女の子よりも、最前列で悪ふざけをする騒々さわごしい男の子のほうが重症じゅうしやうなのである」と興味深い指摘してきを著書『男はプライドの生きものだから』(講談社)でしています。自分の感情を言葉でも、行動でも表現することを学んでこなかった男の子は、心に傷を抱かかえた時にⅢな態度をとったり、暴力を振るったりと外に向けることで解消しようとするからです。^③内面の「弱さ」を抱える男性ほど、虚勢きよせいを張って「強さ」を見せつけようとするということです。

自分の心に向き合ってこなかった男子は、他人の心を想像するのも難しくなってしまう。それでは人との関係性を築くことができず、孤立するばかりのように思えますが、男性の場合、大人になると社会的地位があれば許されてしまう面があります。^④Ⅲ、ここには自分自身が好かれているわけではないという不幸が隠されているのです。

— 中略 —

男子だけではなく女子にもあることなのですが、せっかく恋人ができて、「思っていたのと違う」という理由で別れるケースが少なくあり

ません。とりわけ、年齢、容姿、性格などの条件をつけて恋人を探している場合には、誰とつき合っても長続きしないでしょう。

自分の頭の中のイメージと現実の間にはズレがあります。例えば、控えめな性格だと思っていた彼女が、自分の意見を主張してきたとします。「思っていたのと違う」とがっかりする人は、「正しい」のは⑤で、⑥は「間違い」と解釈しているわけです。現実はいメージからどんどんズレていきますから、相手への評価は下がる一方です。減点式の恋愛をしていると、待っているのは破局だけです。

アイドルであれば、作られた設定のなかでファンの期待を裏切らないように振る舞ってくれます。ファンは応援し、アイドルもそれに応えてくれます。好きという感情を伴いますが、それはあくまで偶像に対するもので、恋愛とは違うものです。現実の女子はアイドルではないので、男子が持つイメージに応えるために存在しているわけではありません。親密な関係性を築きたいのなら、自分が「D」に持つイメージよりも、目の前にいる現実の相手を大切にすることがあります。

⑦ 最近では個人の能力や特性をスペックという言葉で表現しますが、カワイイとかスタイルがいいとかを基準にして知ることができるのは現実のほんの一部です。

外見だけではありません。もし、言語化したり、数値化したりできるスペックだけで人を判断できるなら、就活でも面接を省いて履歴書だけで採否を決めればいいと思いませんか。手間も時間も省けて実に効率的です。しかし、言葉では表現しきれない雰囲気や人柄を見て、面接官は職場にふさわしい人材かどうかを判断しているので、実際に会ってみる

(注1) 偶像：信仰やあこがれの対象となる人。

必要があるのです。逆に言えば、会社でも大学でも、その場に足を運ばないと感じ取れない社風や校風も考慮に入れないと、せっかく「難関大学」や「一流企業」に入っても「思っていたのと違う」となりかねません。恋愛に話を戻すと、相手が自分の知らない一面を見せたとき、そこに面白さを感じることができれば深いコミュニケーションができるようになるでしょう。イメージと現実のギャップを、現実に合わせて修正していく加点式の恋愛です。誰の人生にも固有の歴史があり、そのなかで育まれてきた価値観がありますから、どれだけ一緒にいても新しい発見は尽きません。

もちろん関係性が深くなったからこそ、お互いに相容れないところが目立つようになり、別れてしまうこともあります。見た目が好みだったけど性格が合わないから一週間で別れたというような薄っぺらい恋愛とは違って、一人の女性とじっくり向き合った恋愛の終わりは、非常につらいものです。ただし、決して無駄にはならず、貴重な経験として自分のなかにも、そして、おそらく相手のなかにも残ります。

未婚化・晩婚化の進んだ現代の日本でも、男女共に三〇歳前後になると恋愛の仕方が変わってきます。結婚が視野に入ってくるからです。かつて、とりわけ男性は結婚してようやく社会人として「一人前」とみなされる風潮がありました。独身の男性は会社のなかで、それだけで肩身の狭い思いをしていたのです。ところで、そもそも社会人とはいったいどういう意味で使われている言葉なのでしょう。

大学の卒業式や企業の入社式では、「これから社会人としての自覚を持つてください」というフレーズがよく使われます。ここで「社会」とはほぼ企業社会のことを意味しています。アルバイトやパートをしていても社会人と呼ばれませんので、社会人とは性別を問わずフルタイ

ムで働く人と同義だと考えられます。

⑧ この定義に従えば、日本で暮らす多くの人が「社会」のメンバーから外れてしまいます。まず、高校に通っているみなさんがそうです。大学も含め学校生活は、「社会」に出るための準備期間として位置づけられているわけです。日本では現代でも、家庭での役割を担うために、多くの女性が結婚、妊娠、そして、出産をきっかけに「社会」から離れることとなります。ケガや病気など様々な事情でフルタイムでは働けない場合も、「社会」への参加が十分だとは見なされません。

「健康」な男性には、社会人を続けられる特権が与えられているとも言えます。「進学校」から「難関大学」、そして、「一流企業」という大きな目標を課せられてきた男子が手に入れようとしているのは、この特権のなかでなるべく優位な立場になることだと言えるでしょう。

特権には代償があります。繰り返しますが、現代の日本で、男性だからこその不自由で最大のものは、四〇年にわたって働くというルールです。人生の半分に相当するぐらいの非常に長い期間ですが、性別役割分業を前提とした社会システムでは、男性が定年まで働くのは「普通」とされています。働き続けるのが「当たり前」である以上、なぜ働くのかという疑問を抱くのは「おかしい」とこととされてしまいます。

⑨ 社会人となった男性の目の前には「働くしかない現実」があり、そうした環境に置かれるなかで、「働いてさえいい」という意識を持つようになります。男女で大きな賃金格差のある日本では、結婚をしたり、子どもができたりするほど「働くしかない現実」は強固さを増し、その分だけ「働いてさえいい」という意識も深まっています。

通勤電車は「異常」なほど混雑していますが、毎日、乗車している人にとっては「普通」です。日本は「異常」ともいえる長時間労働が社会

問題ですが、毎日、残業をしている人にとっては「普通」です。会社では学校よりもセクハラやパワハラといった「異常」な行為が見られますが、常に嫌な思いをしたり、させたりしている人にとっては「普通」です。こうした「普通」に慣れなければ、社会人失格の烙印を押されてしまいます。社会はそんなに「甘くない」というわけです。男女の不平等をめぐる議論では、どうしても男性は変わらないのかという話題がしばしば持ち上がります。その一つの答えは、男性は定年退職するまで変わらないことが期待されているからです。⑩ 男性に自省の機会を与えないことで、性別役割分業を前提とした社会システムは回っています。

—— 田中俊之『男子が10代のうちに考えておきたいこと』

(注2) 烙印を押される：簡単にはぬぐえない悪い評価を受ける。

問一

I Ⅲ に入るもつともふさわしい語を、次のア～オから選び、それぞれその記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア しかし イ すると ウ ただし
エ ところで オ あるいは

問二

A Ⅲ D に入るもつともふさわしい語を、次のア～エから選び、それぞれその記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア 一方的 イ 威圧的^{いあつ} ウ 直接的 エ 肯定的^{こうてい}

問三

——線部①「自分の外側にある社会的なルールを内面化していく」とありますが、これはどういう意味ですか。その説明としてもつともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア 性別の自覚がない者が、社会から男らしくふるまうよう求められることで、性別の自覚を持つようになるという意味。
イ はじめは「男らしさ」を表面的に真似^{せま}ているにすぎないとしても、次第にその真似が真に迫^{せま}ったものになるという意味。
ウ 本来の性質から離れていたとしても、理想的な男性像に近づくために、自分を抑えて行動するようになるという意味。
エ 「男はこうあるべき」という価値観を自分に取り込み、無意識のうちにそれに基づく言動をするようになるという意味。

問四

——線部②「教室の隅でひっそり男の子のほうが重症なのである」・③「内面の『弱さ』を抱える男性」を見せつけようとする」とありますが、この表現からどのようなことが分かりますか。その説明としてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、その記号で答えなさい。

ア 「強さ」、「弱さ」と表現されているのは、あくまでも社会における評価であり、この評価が男性を生きづらくしている。
イ うわべだけではない、本当の「強さ」を身につけるには、まず自分の「弱さ」を自覚し素直に受け入れねばならない。
ウ 問題を抱えている場合、ふさぎ込んでいる人はすぐ分かるが、一見元気そうな人だと周囲が気づくのは難しい。
エ 騒々しい男子は自分の心の問題に自覚的でないという点において、心の不調を自覚している女子より深刻と言える。

問五

——線部④「自分自身が好かれていゝ隠されているのです」とありますが、どのような点が「不幸」のですか。その説明としてもつともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

- ア 社会的地位があるから周囲と関係が築けるだけで、自分個人が誰かと個別の関係があるわけではないと気づけない点。
- イ 社会的地位が高いから公的な場で丁寧に扱われているが、私的な場では関係を持つどころか避けられているという点。
- ウ 社会的地位ゆえに虚勢を張っていばつても許されるが、実際は虚勢を張っていることは見抜かれていゝという点。
- エ 社会的な地位ゆえに周囲に尊重され自分の思い通りに事が進むが、内面的成長がないことに気づけない点。

問六

⑤・⑥に入るもつともふさわしい語をそれぞれ本文中からぬき出して答えなさい。

問七

——線部⑦「最近では個人の能力や言葉で表現します」とありますが、「スペック」を辞書でひくと次のような説明がのっていました。次の生徒A～Dの会話を読み、本文の内容と合わない発言をしている生徒を一人選び、その記号で答えなさい。

「スペック」

- ① 仕様。規模・構造・性能などを表にまとめたもの。
- ② パソコン・電子機器の性能。
- ③ その人の外見・学歴・年収など。

生徒A

お店で電化製品を買おうとするとときに性能の表を見て比較します。僕たちだと、成績とか英検の資格とか身長とかが表示されるってことですね。

生徒B

人格も言語化されて「思いやりがある人」とか「明るいけどおつちよこちよい」とか表示されるのかな。こうやって書くと、その人のことがかなり正確に把握できますね。

生徒C

お店の電化製品みたいに自分達がスペックを表示され並べられるところを想像すると、簡単に他の人と比較されてしまうだけじゃなくて、自分が表面的な要素で判断されている気になりますね。

生徒D

自分という存在を言葉や数値化できるものでしか判断されない場合、本当の価値を認めてもらえていない気になります。だから筆者は「スペック」で人を評価することに対して否定的だと言えます。

問八

——線部⑧「この定義に従えば、〽外れてしまいます」とありますが、この表現から、筆者のどのような意見が読み取れますか。その説明としてもつともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア 日本を支えている人はほんの一握りに過ぎないという事実を明らかにすることで、日本社会のもろさに共感している。

イ 企業に属さなければ社会の正規メンバーにはなれないという経済重視の枠組わくぐみに反対している。

ウ フルタイムで働く経済的に貢献こうけんしている人だけを社会の構成員として認めるような表現に違和感を持っている。

エ 既婚男性きこんが「社会」に尽力じんりょくしているとして評価される、男性優位な日本社会のあり方を批判している。

問九

——線部⑨「社会人となった男性の〽を持つようになります」とありますが、ここで筆者が伝えたいことは何ですか。その説明としてもつともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア 一人前の社会人であり続けるには、「一流企業でフルタイム勤務」という条件を満たす必要があるため、「働くしかない」ということ。

イ 女性が家事や育児を担うことを期待されることで、男性は経済的安定を担うことが求められるため、「働くしかない」ということ。

ウ 働くことで男性としての役割を果たしている以上、女性の役割である家庭にまで介入すべきでないと考えるようになるということ。

エ 一般的男性は人生の全てを企業での労働だけに捧ささげているため、定年前に辞めると「普通の男性」失格とみなされるということ。

問十

——線部⑩「男性に自省の機会を与えない」とありますが、ここでの「自省」は、「自分の過去を振り返って考える」という意味です。「男性に自省の機会を与えない」とは具体的にどうすることですか。「〽こと。」に続く形で本文中から十五字以内の言葉をぬき出して答えなさい。

問十一 【問題四】と【問題五】の文章を読んで生徒が話し合いました。

次の生徒A～Dの会話を読み、本文の内容と合わない発言をしている生徒を一人選び、その記号で答えなさい。

生徒A 【問題四】の「透明なルール」、【問題五】の「へらしさ」や「普通」

には似たところがあります。大人も子どもも「こうあるべき」という社会や集団からの圧力があると気づきました。

生徒B 私たちは「目立たない」ために自分と周りを比較するけれど、

大人たちは「社会人」・「普通」の範囲内に自分がいるのかを周りと比べることで確認しているのかなと思います。

生徒C 【問題五】の恋愛の部分は、【問題四】の友達づきあいと似てい

ます。相手に自分の勝手なイメージを押し付けると、相手を許せなくなったり、妬^{ねた}んで排除したくなるのだと思います。

生徒D 期待される役割がそれぞれにあって、それを忠実に果たしてい

れば、社会や集団はうまくいくのだと思います。でもそうすると私達個人が幸せではいられない場合があると学びました。

